

## 赤ちゃん型インタラクション技術で描く新たなコミュニケーション介護支援

コロナ禍により、人と人との距離が広がり、触れ合いを伴うコミュニケーションの機会が激減しています。特に介護施設では、高齢者は重症化リスクが高いため、家族を含めた外部とのコミュニケーションが制限されており、これによって入居者への社会的な刺激が激減する事態になっています。社会的刺激は認知症の予防や症状の維持に寄与すると言われており、症状の悪化を防ぐためにも、新たなコミュニケーション支援が急務になっています。認知症は悪化すると、暴言・暴力、うつ、徘徊といった周辺症状（BPSD）を発症し、介護者の負担が増大してしまうため、コロナ感染予防対策で精神的な負担が増加して介護者をさらに疲弊させることにもつながります。そのため、高齢者に対するコミュニケーション支援は、現在の介護施設において高齢者と介護者両者にとって重要な課題になっています。

この問題に対して、私達のグループでは、乳幼児が介護施設にもたらす効果に着目して取り組んできました。乳幼児との関わり（インタラクション）は、認知症高齢者にとって非常に魅力的な社会的刺激であり、高齢者施設を保育園や児童館、小学校などの子ども用の施設と併設させ、交流をはかる幼老連携も進んでいます。認知症高齢者に対して赤ちゃん人形を使ったセラピーが提案され、高齢者向けの赤ちゃん型ロボットの開発も進められています。しかし、高齢者と赤ちゃん型ロボットのインタラクションをどのように設計するべきかや、そういったインタラクションが介護施設にどういった影響をもたらすのかについては、調べられてきませんでした。こういった調査は、コロナ禍で介護施設への訪問も、入居者間でのロボットの共有利用も制限される現状では特に困難になっています。

本講演では、これまで我々が赤ちゃん型インタラクション技術確立に向け取り組んできた、赤ちゃんのミニマルデザインに基づく、赤ちゃん型対話ロボットを用いたコミュニケーション支援について紹介します。これまでの認知症高齢者を対象とした取り組みや介護施設へもたらす新たな価値について述べ、そういったロボットと共生する介護施設の未来像について議論します。